

『河の辺の翁物語』第九話・第十一話の材料と解釈

濱千代 いづみ

一 はじめに

『河の辺の翁物語』は、江戸時代に尾張国中島郡起村おこし（愛知県一宮市起）で本陣兼問屋場を務めた加藤右衛門七磯足が著述編集した書である。加藤磯足の最晩年にあたる文化二年（一八〇五）に成立した。門人の渡辺為寧に刊行を勧められたが、石川雅望著『しみのすみか物語』を真似たと非難されるのを嫌い、刊行しなかった。全部で一七話の短編が収録してある。本書の冒頭の序文で、渡辺為寧は「是はまさしく近き世にまことにありける事どもを露もさかしらるをまじへずかかれつる」（この書は確かに近頃本当にあった事柄を少しも物知りぶらずに書かれた）ものであると述べている。また、加藤磯足は序文で、第一話を書き留めたのち、「とし頃ききおきた

りしことをも何くれとかきくはへつ」（年来聞いて覚えていたことをも何やかやと書き加えた）と執筆事情を述べている。二人の序文によると、収録話は本当にあった事柄を書き留めたことになる。第二話に関しては、その内容と収録の和歌とから、江戸時代中期の歌人矢部正子の生涯に材料を得ていると判断された^①。矢部正子は渡辺為寧と同郷で、現在の岐阜県本巢郡北方町の出身である。本論では第九話・第十一話の材料になった事柄を明らかにする。そして、今後教材として容易に活用できるように、第九話・第十一話の解釈を行うことにする。

二 第九話の本文と材料

まず第九話の本文を示す^②。現行の表記方法を基にして送り仮名を

付け、繰り返し符号（ゝ、くゝなど）を文字に、平仮名を一部漢字に直してある。

〈第九話〉

今はむかし。京に火いで来て、ここらの家ども焼け広がりて、公卿の家などにも移りもて行きければ、やむごとなきおほんかたがた、ここかしことかちより逃げさまよひ給ひける。道のほどにて風早ノ中納言ノ君、清水谷ノ宰相ノ君行きあひ給ひければ、清水谷ノ君

風はやと大きくもおそろしけふの火や

とのたまひすてて、袖うちかづきて足とく外さまにはしり給ふを追ひて、風早ノ君

清水谷とてやけものこらず

とつけ給ひけるとぞ。

さる折からにも、かかるみやび心のおはしける、いとことなる事にこそと思はるるに、むかし源義家朝臣の「衣のたてはほころびにけり」と言ひかけ給へりしに、安部貞任が「としを経し糸のみだれのくるしさに」とついたりけん、古ことさへぞ思ひ出でられぬるかし。

第九話の前部の内容は、京都で火災があった折、風早の中納言と清水谷の宰相とが逃げる途中で出会い、時になつた付け合いをしたというものである。後部の内容は、源義家と安部貞任との付け合いを思い出したというものである。後部は前部に触発されて付け加えられており、第九話の中心は前部に存在する。

ところで、後部の内容は、鎌倉時代に成立した説話集『古今著聞集』の収載話によって広く知られている。前部の内容を伝える資料は存在するのであろうか。第九話の「京に火いで来て」という舞台や状況、「風早ノ中納言ノ君」、「清水谷ノ宰相ノ君」という登場人物を手掛かりにして資料を搜索する。

江戸時代に京都は二度大火に見舞われた。宝永五年（一七〇八）と天明八年（一七八八）である。そのうちの宝永の大火について、『元禄宝永珍話』巻四に詳しい記事があることが判明した。そして、この記事の中に「風早ノ中納言ノ君」、「清水谷ノ宰相ノ君」と見なせる人物が登場するのである。

この『元禄宝永珍話』は国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによると、現在『近世風俗見聞集第一』収載のもののみが存在する。国書刊行会編『近世風俗見聞集第一』中の『元禄宝永珍話』における「緒言」で次のように紹介している。

元禄宝永珍話四卷。題名の如く元禄宝永年間に於ける、諸国

の珍説奇聞を記したるものにして、撰者未だ詳ならざれど、当
時の見聞録たるや疑なし。

森銑三・北川博邦監修『続日本随筆大成 別巻』中の『元禄宝永
珍話』における「解題」で次のように紹介し、国書刊行会編の重刊
であると述べている。

五代將軍綱吉の時代で、学問・文化に清新の風が漲った、い
わゆる元禄文化を現出せしめた元禄より宝永に至る二十三年間
の、諸国の異聞珍説を編述したものである。(中略) 本書の所
在が知られない為に、重刊にあたっては、明らかな誤りを訂す
るにとどめ(以下略)

右のように『元禄宝永珍話』は国書刊行会編『近世風俗見聞集第
一』、あるいは『続日本随筆大成 別巻』という刊本で閲覧できる。
宝永の大火の記事を後者から引用して示す。

〈『元禄宝永珍話』における宝永の大火の記事〉

○宝永五年三月八日晴天、
午下刻油小路下町家より出火、折節坤風烈、忽及大火に、禁裡院
中其外堂上屋敷寺社民屋一時為灰燼、余炎到下鴨、河合社炎上、
終夜不鎮、翌九日東南風強、四条坊門辺を西へ焼行、未刻三条油
小路にて火鎮る、前代未聞の大火なり、東は河原西は油小路、南は

錦小路北は今出川迄、悉焼失、此節主上東宮加茂へ行幸、仙洞御所
は妙法院宮大仏御所え御幸、中宮は宝鏡寺殿え被為成候、卿相雲
客踏泥土供奉給、(中略)

一、右炎上の時、清水谷大納言実業卿、風早参議公長卿に逢れし時、
風はやと間もおそろしけふのひは 実業

清水谷とて焼も残らず 公長

(以下略)

宝永の大火の記事のうち、出火から鎮火までの火事と皇族方の避
難のようすを意識すると次のようである。

宝永五年三月八日の午後一時頃、油小路の町屋から出た火は南西
の強風に吹かれて大火となった。皇居も公家の屋敷も社寺も民家も
灰燼に帰し、炎は下鴨に至り河合社を焼いた。一晚中鎮火せず、翌
九日は東南の風に吹かれて四条坊門のあたりを西に延焼し、午後二
時頃三条油小路で鎮火した。前代未聞の大火である。焼失の範囲は、
東は鴨川、西は油小路、南は錦小路、北は今出川に及んだ。このと
き主上・東宮は賀茂神社へ、法皇は妙法院宮の大仏御所(方広寺)
へ、中宮は宝鏡寺殿へお移りになった。公卿殿上人は泥土を踏んで
お供なされた。

このように宝永の大火は町並みが一変する大事であった。しかし、『河の辺の翁物語』第九話では、これを「京に火いで来て、逃げさまよひ給ひける」と簡略な書き方で終わらせている。

この火事の説明に続けて、『元禄宝永珍話』は「右炎上の時」として清水谷大納言実業卿、風早参議公長卿という二人の貴族の付け合いを載せる。『河の辺の翁物語』第九話では「けふのひは」を「けふの火や」と助詞を変えたが、二人の貴族の付け合いを載せた。さらに、『元禄宝永珍話』には説明の無かった二人の貴族の行動を「のたまひすててくはしり給ふを追ひて」と描いている。

ここで、二人について簡単に述べる。

清水谷実業（一六四八〜一七〇九）は江戸時代中期の公卿、歌人である。三条西実条の孫にあたり、清水谷公米の養子となり二五歳のとき跡を継いだ。清水谷家は藤原北家閑院流。鎌倉時代初期に西園寺公経の次男実有を祖として創立され、中絶の後、江戸時代に再興した。実業は元禄二年二月（一六九〇）権大納言に昇り、宝永元年二月（一七〇五）正二位に至る。元禄元年二月（一六八八）霊元上皇から和歌でにをは伝授を受け、霊元上皇歌壇の中心的な歌人の一人として活躍した。儒学を熊沢蕃山に師事して学んだ。門下には北村季吟・香川宣阿などがある。著書に『高雄紀行』がある。宝永の大火は実業の最晩年の事件で、このとき『河の辺の翁物語』

第九話にあるような宰相（参議）ではない。『元禄宝永珍話』の呼び方「清水谷大納言実業卿」がふさわしい。

風早公長（一六六六〜一七二三）は江戸時代中期の公卿、歌人で、風早実種の子である。風早家は藤原北家閑院流。姉小路公景の次男実種を祖とする。風早公長は正徳元年七月（一七一二）参議になり、享保四年二月（一七二〇）従二位に至る。父の実種は中納言に至ったが、公長は『河の辺の翁物語』第九話にあるような中納言に任命されていない。『元禄宝永珍話』の呼び方「風早参議公長卿」がふさわしい。

『元禄宝永珍話』は出来事を記述することに主眼があり、『河の辺の翁物語』第九話は「みやび心」を表す物語を叙述することに主眼がある。双方の書記の姿勢には相違が見られるが、『元禄宝永珍話』に宝永の大火の記事が存在することによって、『河の辺の翁物語』第九話は「まさしく近き世にまことにありける事ども」を材料にして創作されたものであることが明らかになった。

二 第九話の語句の解説と内容の解釈

まず第九話の語句を解説する。「京に火いで来て」、「風早ノ中納言ノ君」、「清水谷ノ宰相ノ君」に関しては、前章の説明を参照して

いただくことにする。

①かちより 歩いて。「かち」は乗り物に乗らないで歩くこと。格助詞「より」は動作の手段・方法を表す。

②風はやときくもおそろしけふの火や 家の名の風早ではないが、風が早いと聞くのも恐ろしい、今日の火事であるよ。「風はや」に家名と「風が早い」意味とを掛ける。

③のたまひすてて その場限りにお詠みになって。

④袖うちかづきて足とく外さまにはしり給ふ 袖を頭にのせて、足早に火の外の方に走りなされる。権大納言に昇り、正一位に至り、六〇歳を過ぎた清水谷実業が、どのように避難したかはわからない。ここでは「清水谷ノ宰相ノ君」の緊急の避難ぶりが描かれる。

⑤清水谷とてやけものこらず 清水の湧く谷と書いて清水谷といっても焼け残ることはない。「清水谷」に家名と清水の湧く谷の意味を掛ける。京都市埋蔵文化財研究所（一九九九）によると、清水谷家は宝永の大火で罹災し、その後、その区画は隣家の柳原家のものになっている。

⑥ことなる事 すぐれてゐる事。

⑦源義家 平安時代中後期の武將（一〇三九〜一一〇六）。源頼義の長男。八幡太郎と称した。父に従って前九年の役で陸奥の安

倍貞任を討った。のち陸奥守兼鎮守府將軍となった。後三年の役で清原氏の内紛を鎮圧し、東国に源氏の基盤を築いた。正四位下に至る。『古今著聞集』巻九、武勇第十二に「源義家衣川にて安部貞任と連歌の事」がある³⁾。

⑧衣のたてはほころびにけり 衣の縦糸がほころんでしまったよ。（衣川の館は耐えられなかったよ。）「衣」は掛詞で衣服の「ころも」と衣川という地名の「ころも」を表す。「たて」も掛詞で縦糸の「たて」と岩の意味の「たて」を表す。

⑨安部貞任 平安時代中期の武將（一〇一九?〜一一〇六?）。安倍頼時の子。厨川くろがわ二郎と称した。父とともに朝廷に反抗したが、陸奥に着任した源頼義に帰順した。前九年の役で頼義軍と戦い、出羽国の清原氏が頼義軍に加わってから敗戦が続き、厨川柵で敗死した。

⑩としを經し糸のみだれのくるしさに 年月を経た糸の乱れが激しいので。（長年の戦いに秩序の乱れが生じたので。）「いと」は「糸」を表し、衣の糸と、「糸乱れず」のように使うときの秩序を意味する。

次に第九話本文の解釈を記す。

今となつては昔のこと。京都で火災が起きて、このあたりの家々

に焼け広がって、公卿の家などにも次第に移って行ったので、高貴な御方々は、あちらこちらと歩いて逃げさまよいなさった。道筋で風早の中納言の君と清水谷の宰相の君が行きあいなさったところで、清水谷の君が

風はやと聞くもおそろし今日の火や

とその場限りにお詠みになって、袖を頭にのせて、足早に火の外の方に走りなざるのを追って、風早の君が

清水谷とて焼けも残らず

と付けなさったということだ。

そのような一大事のときにも、このような風流を楽しむ心のお有りになったのは、本当にすぐれている事であると思われるが、さらに、むかし源義家朝臣が「衣のたてはほころびにけり」と言いかけなされたのに、安部貞任が「としを經し糸のみだれのくるしさに」と付けたとかいう古い出来事まで思い出されてしまったよ。

四 第十一話の本文と材料

第九話の場合と同様に、まず第十一話の本文を示す。

今は昔。冬の頃、ある大臣家の築土のもとに捨て子の有りけるを、其のみたちに拾ひいれ給へりしにや、そは知らず、其の頃めづらしきことなりとて、捨て子をあはれむてふ心を、貴きもみじかきも、きそひてよみ給ひける中に、いづれの公卿の御歌にか

哀れなり夜はに捨て子の泣きやむは母にそひねの夢やみるらんといふ有りけるを、ことにすぐれたりとてこころめで給へりしを、ある上達部、此の歌の下ノ句いかにぞや思はる、「捨て子のなくを拾ひもせずして、よそに聞きたるさまに聞こゆめり。此の下ノ句『こゝえや死にし、犬やくひけん』なんどもすべき歌なり」と、たはぶれ給へりければ、ことさめて、そこにおはしける御かたがた、いみじうとよみ給ひけり。さて、「まろは

捨てしおやはさぞ捨てかねて捨てつらん捨てられし子のあぢきなき声

かくぞよみたる」とのたまひければ、みなめでくつがへり給ひけるとなん。

とし経て後、ある田舎人、上の件のごともを聞きて、「かしこけれど、『捨てしおやは』の御歌も末の句整ひても聞こえざんめり。『よそに見るだに見すてえぬ子を』とこそせまほしけれ」と、言ひたりしとぞ。いとをこがましきことなりかし。

第十一話では「捨て子をあはれむ心」を詠んだ歌が話題になっている。前部は貴族の集まりの場を舞台にする。「哀れなり」の歌を優れた歌だと人々が賞賛したところ、ひとり戯れの歌を詠み座を白けさせる。しかし、「捨てしおやは」の歌が詠まれることで、人々は感嘆を共有する場に戻っていく。後部は田舎人が「捨てしおやは」の歌を非難するというもので、それを作者は「いとをこがましきこと」という。第十一話では、「哀れなり」の歌、「捨てしおやは」の歌を手掛かりにして資料を搜索する。

「哀れなり」の歌

「哀れなり」の歌は『新編国歌大観』第八卷（私家集編IV）に収載されている。引用して示すと次のようである。

飛鳥井雅親「続丑槐集」

東山殿より夜ふけてかへりける道に、すてごの侍るが、なきやむをききて

あはれなりよはにすてごのなきやむは親にそひねの夢やみる

らん

『河の辺の翁物語』第十一話では「親にそひねの」を「母にそひねの」と名詞を変えている。

作者の飛鳥井雅親（一四一七〜一四九一）は室町時代の公卿、歌

人、書家、鞠家である。権中納言雅世の子で、寛正元年（一四六〇）正二位、文正元年（一四六六）権大納言に至る。父に家学の指導を受けて、十四歳で幕府歌会始に初出仕した。康正元年（一四五五）の内裏歌合にはじめて判者となり、以後堂上歌壇の中心となって活躍した。寛正六年（一四六五）二月に勅撰集撰者の院宣を受けたが、応仁の乱の勃発によって撰修は中絶した。乱の間は近江柏木郷に移り乱を避けた。号は柏木。著書に『丑槐集』『和歌道しるべ』などがある。

詞書にある「東山殿」は足利義政の山荘のことで、一四八二年に着工し、翌年六月に常御所が竣工して義政が移住した。ここは後土御門天皇の御座所にもなった。東山殿の竣工の時期から推測すると「哀れなり」の歌は一四八三年以降の飛鳥井雅親晩年の詠になる。

「哀れなり」の歌は江戸時代にしばしば取り上げられている。

『狂歌大観』第一卷（参考篇）の『新旧狂歌俳諧聞書』（編者未詳、江戸時代前期）に次のように収載されている。

有人道を夜るとをりし時うつくしきすて子ありけりしばし

なかさりければ

82 あはれなり夜半にすて子のなきさすははにそひねの夢や

見つらん

『狂歌咄』(浅井了意、一六七二年)には次のように収載されている。

〔赤染衛門〕

146 哀れなり夜はに捨子の啼きやむは親にそひねの夢やみるら

ん

『新旧狂歌俳諧聞書』では「泣きやむ」が「なきさす」に、「みるらん」が「見つらん」に変化している。「哀れなり」の歌は『好色一代男』で「小町が詠みし」、「村井長庵之記」(『大岡政談』)では「後水之尾帝の御製」として載っている。

このように、「哀れなり」の歌は江戸時代に歌詞を一部変更し、作者をいろいろに設定して引用されていた。

「捨てしおやは」の歌

「捨てしおやは」の歌は『古事類死』⁽⁴⁾、人部三、親戚下の「平安落穂集 三」捨子之事に「哀れなり」の歌とともに掲載されている。それを次に引用して示す。『平安落穂集』は江戸時代後期に成立していたと推定される。⁽⁵⁾

〈『平安落穂集』における「捨子之事」〉

延享之頃、今出川通り近衛殿の堀の外面に捨子ありしを、御裏なる姫君の御方聞し召、不便に思召、ひろわせて育させ給ひし、其北側

冷泉家の屋敷なりしが、此事を為村卿よみ給ふ、

捨し親の嘸すてかねて捨つらん捨られし子のあぢきなき声、と
なん、又享保の末の頃、かたじけなくも、靈元帝、捨子といふ事
間に達せしかば、

哀なれ夜半に捨子の泣止むは親に添寝の夢や見つらん、と遊ば
されしぞ有がたき、

「延享」(一七四四〜一七四八)は江戸時代の元号である。延享の頃の「近衛殿」は近衛内前(一七二八〜一七八五)を指すのであろう。父の近衛家久は元文二年(一七三七)に没している。近衛殿の屋敷は烏丸今出川にあった。その屋敷の堀の外に捨て子があったのを、姫君が聞いてかわいそうに思い、拾わせて育てさせたのである。

「為村卿」は冷泉為村(一七二二〜一七七四)のこと。江戸時代中期の公卿、歌人である。父は権大納言冷泉為久。宝暦八年(一七五八)正二位に進み、翌九年十月権大納言に任ぜられ、十年二月辞任した。明和七年(一七七〇)に落飾し、法名を澄覚と称する。冷泉家の嫡流(上冷泉)で、家業の和歌で名声があり、流派の隆盛に尽くした。多数の門弟を擁し、江戸時代の堂上歌壇に足跡を残した。歌集『冷泉為村卿家集』、歌論書『樵夫問答』などがある。

『河の辺の翁物語』第十一話の「ある大臣家の築土のもとに捨て

子の有りけるを、其のみたちに拾ひいれ給へりし」は、近衛殿の姫君が捨て子を拾ったことを、ある貴族が「捨てしおやは」の歌を詠んだことは、捨て子の話を耳にして為村卿が詠んだことを材料にしている。

さて、『平安落穂集』では「哀れなり」の歌（同書における「捨子之事」では「哀なれ」）の作者に「靈元帝」を設定している。「靈元帝」（二六五四～一七三二）は江戸時代前期の歌人で、父は後水之尾天皇である。天皇として二四年間（一六六三～一六八七）在位し、「享保」（一七一六～一七三六）には上皇であった。

以上のように、「哀れなり」の歌は江戸時代に作者をいろいろに設定して引用されていた。『河の辺の翁物語』第十一話で「哀れなり」の歌の詠み手とされる「公卿」について、飛鳥井雅親を念頭に置いていたのかもしれないが断定できない。しかし、『平安落穂集』における「捨子之事」に「捨てしおやは」の歌が詠まれた事情が記録されていることによって、『河の辺の翁物語』第十一話も「まさしく近き世にまことにありける事ども」を材料にして創作されたものであることが明らかになった。

五 第十一話の語句の解説と内容の解釈

まず第十一話の語句を解説する。

①築土 土をつき固めて造った塀。「ついひぢ」の変化形。

②みたち お屋敷。

③そは知らず それはさておき。「…は知らず」で問題にしない意味を表す。

④貴きもみじかきも 位の高い方も低い方も。

⑤哀れなり夜はに捨て子の泣きやむは母にそひねの夢やみるらん
心にしみることもよ、夜更けに捨て子が泣きやむのは、母に添い寝する夢を見ているのであろうか。

⑥よそに聞きたる 他人のことにように聞き流している。

⑦聞こゆめり（と）思われる。「聞こゆ」は内容がそのように受け

取られるの意味。助動詞「めり」は婉曲に述べる意を表す。

⑧ごこえや死にし、犬やくひけん ごこえ死んだか、犬がくったか。

⑨まる 一人称の代名詞。私。

⑩捨てしおやはさぞ捨てかねて捨てつらん捨てられし子のあぢきなき声 捨てた親はさぞ捨てようかどうか思い迷って捨てたであろう、捨てられた子の胸に迫りくる泣き声よ。

⑪めでくつがへり 大いに感嘆する。「くつがへる」を動詞に添え
るとその動作を強める。

⑫よそに見るだに見すてえぬ子を よそながら見るのでさえ見捨て

ることのできない子を。

次に第十一話本文の解釈を記す。

今となつては昔のこと。冬の頃、ある大臣家の土塀のもとに捨て子が有つたのを、そのお屋敷に拾い入れなされたのであろうか、それはさておき、その頃すばらしいことであるとして、捨て子をおわれむという心を位の高い方も低い方も競ってお詠みになった中で、どちらの公卿の御歌であろうか、

哀れなり夜はに捨て子の泣きやむは母にそひねの夢やみるらん
という歌が有つたのを、特にすぐれているとおっしゃって、このあたりの方が賞賛なされたのを、ある上達部がこの歌の下の句をどのように思われたのか、「捨て子の泣くのを拾いもしないで、他人のことのように聞き流しているように思われる。この下の句を『こごえや死にし、犬やくひけん』などにもするのがよい歌である」と、ふざけなされたので、一座の興がさめて、そこにおいでになった御方々が大層騒ぎなされた。さて、「私は

捨てしおやはさぞ捨てかねて捨てつらん捨てられし子のあぢきなき声

このように詠んだ」とおっしゃったので、皆大いに感嘆なされたということである。

何年か経って、ある田舎者が上に述べた事柄を聞いて、「おそれ多いけれど、『捨てしおやは』の御歌も末の句が整っていると思わない。『よそに見るだに見すてえぬ子を』としたいものだ」と言つたということである。はなはだ馬鹿げたことであるよ。

六 おわりに

『河の辺の翁物語』の序文によると、収載話は本当にあつた事柄を書き留めている。本論では『元禄宝永珍話』や『平安落穂集』などに同様の内容記載があることを示し、第九話・第十一話が本当にあつた事柄を材料に創作したものであることを明らかにした。そして、教材としての活用を期待し、第九話・第十一話の語句説明と解釈を行った。今後も継続して『河の辺の翁物語』収載話の材料を探索する予定である。

注

(一)『河の辺の翁物語』の第二話と矢部正子とを関係づけて論じたものに市橋鐸(一九四三)がある。濱千代いづみ(二〇一七)は第二話を地域教材として開発し、学習指導に必要な諸種の解

説と情報載せた。

- (2) 『河の辺の翁物語』の伝本は、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによると三本存在する。すべて写本であり、編著者の加藤磯足自筆のものではない。三本は①大洲市立図書館矢野玄道文庫、②刈谷市中央図書館村上文庫、③早稲田大学図書館に所蔵されている。①は国文学研究資料館の電子資料館で公開されている画像、②は電子複写資料、③は早稲田大学図書館の古典籍総合データベースで公開されている画像を利用した。第九話・第十一話の本文は、書写事情が明記してある②を基準に置き、①・③を参考にして作成した。
- (3) 築瀬一雄（一九八八）の公開した磯足の蔵書目録に『古今著聞抄』廿が載っている。
- (4) 国文学研究資料館の古事類苑データベースを利用して閲覧した。また、刈谷市中央図書館村上文庫蔵『平安落穂集 三』の同部分をマイクロフィルムで確認した。
- (5) 西尾市岩瀬文庫の古典籍書誌データベースに「成立推定」が「近世後期写」とある。刈谷市中央図書館村上文庫蔵本の一巻に「文久二戊」の挟み込みがある。

文献

- 市橋鐸（一九四三）「矢部正子と加藤磯足」『伝記』一〇―一二 伝記学会
- 狂歌大観刊行会（一九八四）『狂歌大観』二 参考篇 明治書院
- 京都市埋蔵文化財研究所（一九九九）発掘調査現地説明会資料「平安京左京北辺四坊―京都御所東方公家屋敷群跡―」
- 国書刊行会編（一九二二）『近世風俗見聞集第一』国書刊行会
- 新編国歌大観編集委員会（一九九〇）『新編国歌大観』八 私家集 編IV 角川書店
- 辻達也編（一九八四）東洋文庫『大岡政談』二 平凡社
- 暉峻康隆・東明雅編（一九九六）新編日本古典文学全集『井原西鶴集』一 小学館
- 濱千代いづみ（二〇一七）「地域素材の古典を活用した地域教材の開発と説明―加藤磯足『河の辺の翁物語』の第二話より―」『岐阜聖徳学園大学 国語国文学』三六
- 森銃三・北川博邦監修（一九八二）『続日本随筆大成 別巻』吉川弘文館
- 築瀬一雄（一九八八）「加藤磯足の蔵書目録」『研究と資料』二〇 研究と資料の会